

## ドイツ・テューリンゲンの「バッハ週間」から オープニング・コンサートの《マタイ受難曲》と翌日の Voces 8

3月28日●アルンシュタット・バッハ教会

29日●エアフルト・トーマス教会

取材・文=中 東生

2005年にリニューアルした「バッハ週間」が10年の節目を迎え、この数年で訪問者数が3倍になったという。テューリンゲン州の、J.S. バッハに所縁のある15カ所の土地にまたがり、3週間に渡って開催されるフェスティバルは、バッハの足跡を追う実感を与えてくれる。バッハ生誕の地アイゼナハ、両親の死後、兄の家に身を寄せたオルトルーフ、最初の結婚式を挙げたドルンハイム、11年間楽師長を務めたワイマールなどを回ることによって、300年前にそこに存在していたバッハの想いが、彼の音楽と共鳴するような体験を現地からレポートしたい。

3月28日のオープニング・コンサート《マタイ受難曲》を聴いた。会場はアルンシュタットのバッハ教会。ここでは、バッハ一族が音楽家として活躍しており、ヨハン・セバスティアン自身も、18歳で初めてオルガニストの職に就いている。今回は、名福音史家のクリストフ・プレガルディエンが指揮者としてのみ登場するはずが、福音史家の歌手が病気のため、歌い振りをすることになった。最初の方、特にフレーズの終わりのあたりで、次のタクトを考えているのが判り、こちらも落ち着かなかったが、ドラマが進行するにつれて歌と指揮が一体化し、まさしく、自分が見た体験を皆に伝えているような臨場感が出て来て効果的だった。ル・コンセル・ロレンが奏でる音楽も雄弁だった。

イエスを歌ったディートリッヒ・ヘンシェルは熱唱してはいるのだが、そのオペラ風の歌い方は、「神の子」としては世俗的過ぎると思われた。ソプラノのハナ・ブラズイコヴァは、ノンヴィブラート唱法で、バロック初期のレパートリーに最適な歌手と



アルンシュタットのバッハ教会で行われた《マタイ受難曲》から。クリストフ・プレガルディエン指揮ル・コンセル・ロレン。名テノールでもあるプレガルディエンが指揮と福音史家を掛け持ちして「歌い振り」を行った © Jens Haentzschel.psd

思われる。アルトのマリー・クローデ・カブュイは声量や響きの深さがないものの、温かい歌唱を披露した。テノールは、「滅多にない競演の機会」と、父親のクリストフが感慨深そうに話していた息子のジュリアン・プレガルディエンであるが、堂々とした音楽捌き是一流であった。バスのコンスタンティン・ヴォルフも美声に頼らず、それぞれの役を上手に歌い分けていた。バルタザール・ノイマン合唱団はソリスト並みの表現力で、音楽的緊張感をより盛り上げていた。

翌日は別の《マタイ》がワイマールで演奏され、聴き比べるのも面白かっただろうが、全く別のアプローチである Voces 8 を聴いた。英国の若いアカペラグループで、メンバーはソプラノ二人、カウンターテナー二人を含む男声6人の計8人。これまで3度来日している。今回の演奏では、5人の男性が交代でコメントを挟むのだが、これがまた人を惹きつける。確固たる歌唱技

術に基づく若者ならではの遊び心が、バッハランドの真面目な聴衆を柔軟にし、大喝采でコンサートを終えた。彼らはパレストリーナなどの16世紀から、500年間のヨーロッパ各国のスタイルを、高レベルなアンサンブルで聴かせたが、現代の英シンガーソングライター作《Underneath the Stars》が出色の出来であった。

毎年復活祭の時期に開かれるこのバッハ週間の他、8月に開催されるアカデミーや、マスタークラス、コンサートなど年間通しての企画も続いていく。バッハ週間の聴衆2万5千人の60パーセントが旅行客だという。「この作曲家を、これだけ凝縮して、また多面的に体験させてくれる機会は他にない」と評価されているように、こうしてまた今年も、バッハ・ファンが世界中に増えていくのだろう。



ワイマールにあるバッハ像 © Jens Haentzschel